

「生きてきてよかった」と感じられるつながりを!

生活困窮者の交流の場「サロン・ド・カフェこもれび」と「ヒー焙煎プロジェクト」

稲葉 剛 NPO法人自立生活サポートセンター・もやい代表理事

■「こもれび荘」にたどり着く人々

JR飯田橋駅^{いひだばし}から歩いて約一二分、東京二三区の「へそ」に近い位置に、私たち(へもやい)の活動拠点「こもれび荘」がある。築四〇年を超える古い一軒家だ。

「こもれび荘」を開設して三年半。これまでここをめざしてやってきた生活困窮者は二〇〇人を超える。アパートの連帯保証人が見つからない「ホームレス状況」の人たち、所持金が一〇〇円を切って交番で交通費を借りて生活の相談に来た人たち。千葉から自転車^{自転車}を九時間こいでたどり着いた若者

や、北海道からフェリーに乗り、茨城県大洗^{おおい}の港から一〇日間野宿しながら歩いてきた若者もいた。

ここにいると、日本社会に「貧困」が広がっていることが否応なくわかる。バブル経済崩壊後、路上生活という究極の貧困状態に陥ったのは主として中高年の男性であったが、最近は一〇代から七〇代までの老若男女が生活の相談に訪れており、単身者だけでなく夫婦や親子など家族ぐるみの相談も増えている。もはやかつてのように、地縁・血縁や企業共同体が人々の暮らしを支えきれなくなっているのだ。

私たちは相談に来られた方の話を聴

障を手に入れる。「こもれび荘」に來られた人が最低限、「これで死なないで済む」と思えるための生活の基盤づくりを支援する。それが私たちの活動の柱である。

■「寂しさ」と向き合うために

しかし、「生きる」とことと「生存」は同義ではない。かつて、私たちの活動に参加していた五〇代の男性、Kさんは私にこう語ったことがある。

「毎日、朝起きるのがつらくて、寝たままテレビを見ていると、なんか外の世界と自分がつながっている感覚がなくなってくるんだよね。自分がエイリアンにでもなつて、外から世界を眺めているような感じになる」

Kさんは難病と闘いながら生活保護を受け、居宅生活を維持していた。自宅と病院の往復で終わる日々。彼はそ

の単調な生活で感じる「寂しさ」をよく口にしていたが、彼の語る「寂しさ」は彼個人だけのものではなく、生活保護や年金で暮らす生活困窮者一般に共通する悩みを彼が代表して語ってくれているのだと私は感じていた。

最低限の生活が保障されれば、それでハッピーエンドではない。長い人生のなかで失ってきた「人とのつながり」をもう一度回復できるような場所をつくること。生存を存続させるだけではなく、「生きてきてよかった」と思えるようなつながりをつくっていくこと。それが私たちの活動のもう一つの柱になった。

そのためにも寂しがりやのKさんの言葉はたいへん参考になった。「気軽にふらっと遊びに行けるような場所が欲しい」と、彼は常々言っていたのである。

き、緊急的な援助をおこなないながら、行政による適切な支援を求めて役所に一緒に足を運ぶ。ほとんどの場合、生活の困窮は極限状態にまで達しているので、生活保護の申請をおこなうことになるが、これには役所側の抵抗も大きい。だが、生活に困窮した当事者が申請の意思を固め、法律に則^{したがって}った運用を書面で求めることにより、役所側の抵抗は最小限に抑えることができていく。ご本人が定まった住居がなく、ホームレス状況にある場合は、私たち自身が連帯保証人となって、アパートへの入居の支援をおこなっている。

住まいを確保し、最低限の生活の保

Kさんのそうした思いは、多くの人に飛び火し、二〇〇四年六月、「こもれび荘」開設に伴い、私たちは交流サロン「サロン・ド・カフェこもれび」を開店した。土曜日だけ営業する小さなカフェである。メニューはコーヒー一杯一〇〇円、週替わりランチが三〇〇円。いずれも生活困窮者が気軽に來れるようにと、Kさんをはじめとする当事者スタッフが設定した価格である。

だが、Kさん自身は開店から一年ほどしてサロンには顔を見せなくなり、翌年、だれにも看取られずにこの世を去った。Kさんの訃報^{しよほう}を聞いたとき、私は「自分は病死するに違いない」という思いに日々直面していたKさんの「寂しさ」に自分たちは向かい合えなかったのだ、ということを感じさせるをえなかった。



「こもれびコーヒー」をどうぞ！

■「こもれび」を通じた新たなつながり

その後、新しいスタッフも入り、交流サロンでは「ここに集まった仲間と共に何かを生み出したい」という思いが沸き立っていた。二〇〇五年二月、「サロン・ド・カフェこもれび」は民間の助成金を活用して、コーヒー焙煎プロジェクトという新たなプロジェクトを発進させる。東ティモールを支援する日本のNGOと連携して、フェアトレード（民衆交易）の仕組みで購入したコーヒーの生豆を自分たちで焙煎し、販売しようという計画である。そこには、ものづくりを通して「つながり」をさらに強固なものにしていきたいという希望と、国内の貧困問題とグローバルな南北問題をコーヒー豆という具体的な商品を通してリンクさせていくという野心とが交錯し

ていた。

プロジェクトは、アジア太平洋資料センター（PARC）のスタッフを招聘して、東ティモールの歴史と現状を学習することからスタートした。その後、実際に生豆を購入して、慣れない焙煎機を使いながら試飲を重ね、味の探求を進めていった。そして二〇〇七年一月、ようやく独自ブレンドが完成し、「こもれびコーヒー」の販売を始めることができたのである。

コーヒー焙煎プロジェクトも、交流サロンと同じく路上生活を経験した当事者が中心となって事業を進めていった。月に二回のミーティングから始め、それが週に一回、二三日に一回と密度が濃くなるにつれて、当事者スタッフの意識も変わってきた。

かつて喫茶店のマスターを務めたこともあり、独自ブレンドの開発の要と



コーヒー豆の選別作業

なったMさんはこう語っている。「ここで始めたコーヒー焙煎を通じて親しい仲間ができた。今まで人と接するのが苦手だったけど、ここに来てコーヒーをしながら（苦手意識が）取れてきた」

また、心臓の疾患を抱えながらプロジェクトを引っ張るHさんはこう言う。

「みんななりたくてホームレスになったんじゃないし、なりたくて生保受給者になったんじゃない。みんなちゃんと仕事してきて、どこかでちょっとした拍子につまずいて、身動き取れなくなっちゃって。ホームレスなんてやりたくないと思うから、みんななんかにすがりついて、自立してきてるわけじゃん。（コーヒー焙煎を通して）そういう人がもう一歩進めるような状態になれば、すっげーいいと思う」

現在、「こもれびコーヒー」は、「こもれびブレンド」と「東ティモールストレート」の二種類を販売（各二〇〇

R、七〇〇円、送料別）。コーヒーの鮮度を保つため、完全受注生産をおこなっているが、固定ファンも増えており、月産で二百数十袋を販売している。二〇〇七年四月からはコーヒー焙煎に加えて、コーヒー豆の製造過程で出るコーヒーの煎れカスや欠損豆を使つてコーヒー染めを作るというプロジェクトも始まった。こちらは初心者でも気軽に参加できる作業なので、もう一つの居場所として人が集まってきている。

私たちの次の目標は、「死」という人生の最後のステージにおける支援に着手することだ。「無縁仏」になることを寂しく思っている人はたくさんいる。合同墓の設立や心温まる「お見送り」の工夫など、「最後の安心」が今を生きる力になるような支援を考えていきたい。

また（もやい）のなかでは、ドメスティックバイオレンスなど過酷な時期を経験してきた女性たちによる集まりや、今の社会に「生きがたさ」を感じる若者たちのグループも生まれてきている。後者のリーダーを務めているのは前述の北海道から来た若者だ。さまざまな人々が呼びかけて、いくつもの輪をつくることで、全体としてゆるやかなつながりをつくっていききたい。

人間はひとりりで生まれて、ひとりで死ぬといわれる。Kさんがみんなを代表して語っていた「寂しさ」に肉薄していく試みは、究極的にはすべて徒勞に終わるのかもしれない。それでも、「こもれび荘」にたどり着いた人たちが、「今、生きてきてよかったと感じる」と思えるようなつながりを求めて、これからも試行錯誤を続けていきたいと思っている。